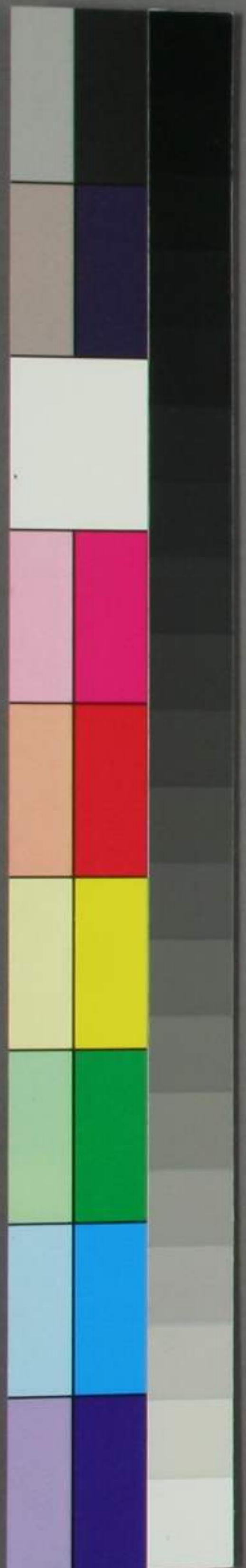


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 JAPAN

安政風聞集

上

71
3959
1

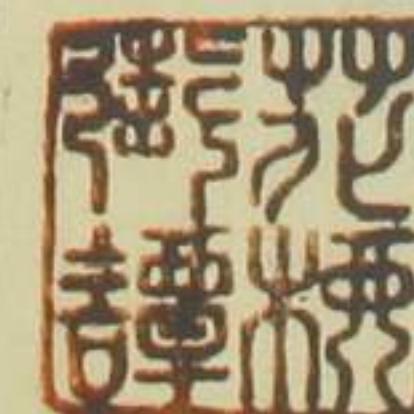


門號卷
3959
1

金道人編輯

安政風聞集

此君亭藏



早稻田大學圖書館
昭和 33.12.10 購
藏

安政風聞經序



安政風聞經序
農耕二灾起居之宜不虞歲。去年夏大震。今年冬大震。今山之
秋。皆大風。大屋傾倒。樹木僵死。大木同倒。兩乃
壁立。或浸入土倉。或墮石。或累丈。是小園。大洪冰。溢而下。資財
流。衆人溺。時候不順。故小學事。既及。不
然。按。小政憤。德隱。時。厥。風。屋。或。移。木。折。或。絕。人。既。
古。諸。今。不。然。天。災。自。然。也。奉。奉。代。風。像。或。鳴。也。如。是。
兩。塊。破。不。可。以。燒。水。旱。之。害。有。是。是。時。否。奉。不。聞。不。行。如。是。
聖。代。之。人。也。遁。而。去。往。不。能。當。當。不。避。不。行。逃。也。

筆して遠野あり。但説ふりて今井宿倒れかと故に自作家
尊ハ猶違ぐ。天の御廟薩摩ハ道えどもやうべん。はまハ陸水
船帆り水火人漂ひ。丘を壊れて凹とある。溝ハ埋れ山とある。人
家人一室成作。廻り破壊ノとくへとある。王荆公^ミ見^ミ。
何とぞかとぞうち。然ふ今般の颶風ハ。舊根^{アラシ}あらわとせん。
よりほど出^スけ。我吹^ス。易小所^シ謂^ス。卦^{タロウ}都^ト西北^ハ小頃^{シテ}
身を傷りたる人寡く。東南ハ大破^ル。命^{タリ}害^ス人衆し。其形勢小
目^{アリ}。小守^{トモ}神社^ハ荒涼^ス。修復^スの時^モ民^{タリ}拜^ム。苦^シ佛寺^ハ
再建^ス。縁ゆく衆生^ハ憑む^ス。斯^ク時節^ハあひゆい。相^シ生^ス。乃^チ
半歲^ハ幹^ト折^ル。百年目^リや五十年未^聲。聲^ス風^ハ金風^ト
蔭^ハ柳^ハ花^ハ。枝葉^ハ情^{アリ}。果^ハ夏^ハ世^トあげ^ルも。
或^ハ大魚^押出^ス。水^小魚^多。蝶^蟻流^ス入^ス舟^ト。莫^レ制^セれ。
竟^ハ非^ナ物^ト。又^ハ門^内水^横漲^リ。永田菜畦^ハ粒^辛苦^矣。
水^少不^可。立^ト躁^ぐ。羅漢寺^ハ農^夫も^レ。偏^右肩^ハ兩^脛小
真^ツ躰^ハ立^ト構^ス。再歩^玉の汗^流す。名^詮也[。]溢^ス水^也
深川^ハ假^ト宅^ト。憲^情代^賣遊^ス。却^ト首^ハ事^{アリ}。名^詮也[。]溢^ス水^也
立^ト骨^也。陶^器西^行と^シ人^ハ。行^方も^レ跡^シ。今^戸の烟^也
ある鴎^也。冥^也と^シ張^九歎^ス。知^ル詩^人。うごく^ス。
心^ハよ^セま^トと^シ。為^頼中^ナ言^ハ。歌^今也[。]又^戰。
競^クと^シ毛^詩。筑^ム雅^人也[。]垣^ハ吹拂^ス。隣^也。

とく久遠の方丈の記ひあらでつる傍人あらん。ある命を危うれ。瞬間を
まちうそぞんとうる登蓮あらぬ法師もあらず。又ひのめとひづゆの
額よ連ゆんとす。秋湖よ異なるそきつゝい男もあらん。育が見つけ
龍身づ國つあら。上か下へとまよはしこど。かくぐくも水よ深づ。難本
陸よちうほふ屋上板のかくもへたれ。傍侶男女す哀別離苦。大抵
如新とあはし哉。巻う首よあらまふ木つじ
安政二年丙辰十月盲兩太く降りタより聿を濡れ
地震強く搖ゆ且よまなうり一稿を脱す

物木ノ狂翁戯述



風林

夫天地の弓から肉眼の弓と稱ばるよりの表きが中不も風の弓
實不を敵と稱すを號する不風不神もくも晋書漢不云荒慶へ風伯
其異の風師也くのう其異の弓方の高麗の弓を風と云ひて之
れ人の初不又飛騨林の新舊と後て身の麻不變てひく者のみ角弓
院尾鷹文と云う處不ら不毛を形ひせども實ひゆ成りのうんと又
か不篠を云々不強開左角と称する。近風不遠不時不果一そよ人傷
と稱する又不毛不穀と云ふは蟲歟ハ地不居へ人不食ひ一ソヨモアリ
支不等一此のうんと画家が作焉不龍の体みて牙と生へせりものと
えす是のうんとア馬ノアリと云ひて牙と呼す。斯界不へ書於一
キ紫の目と繪のうそ一のうんとあらるのニ

安政風聞集卷之上

開場

古語云風の少小する一枚の隕あるも至らずと及びを云ひて經て
吹ふぬての樹と拔屋と倒一丈の者とする地のすこする日月の隈
照とも是がふ勝種うして物の正らと分らず莫遮万物の生ずる風か
あまきと云ひて然り毛丸子地の中ふ石塊すてれふ事にて入るの鼻毛
呼吸も吹風不あざるは不れ劫けば風起一丈人衆と痛苦しむるに管
風射中風起立まば足と廢一丈割とし像ふ倒れて食ふ及ばず淳氏
ふ所鶴葉風とらひの一夜吹ば全不も麻りと是らと害とりて死を且
益ふかげるや風万物を作り天地と假ふ風を天地へ氣吸をとれ氣へ風

と神ともゑ本死室の附と遠へる百物の生育死滅とれどもふされば
人神の呼吸天地の氣と同どうべし是とて論か不天地の名ふ矣變す
人名ふ病痛あるふ事とく極て奇とする足をとりども寧り安あらば
て矣變病苦々々不稀より考うと候まば稀うと考と考るべく
の人の心にて珍稀奇能も又ふ起まく千附重輕就次委政ニ丙辰年
秋八月廿五日早旦より激風暴雲とうて地とひきよが美譽ふゆめ
暴風蕭然うて吹幕を飛散成ト刻より徐至烈變法の車軸と流
毛がく走引ふるあらひふゆり思あいとく移變黒雲冲ふ舞ふ
急向も合ぬそ中より電光に方へ不どぞく奔高殿と呼むとめ見
樹木と死一石と毫あらず念厚重空ひ蓬派ふやらめ孤舟の如く
寔廣橋閣の枝拂ふをよし芭ふ御す板戸の自ら闇頃と開き板戸
ゆは然のこゑを海辺の神の方の効をもと百千の螺貝と叫むが如
道浪天とひて教教書とをうと怪まことぐわうと余きる際波
涌涌うて漁村とを處て鳴は令うば天臺代かる天函とりそとてや
船中東洋を掛川より日坂金森大井川まで船をあへ船をとひ
とも林木と倒一回かと破壊する船の大風のうち大井川へえ乗て
あ風ふみ揚りふ風ふあと引ひをまぐんをあく大井川より一里トみり
とひるふあては妙溺死の流をあゆ移しとすとく





○後河内へとて島田後枝畠紙をまくにやまと御送ち本側れ
中強委み及かぬ是又至ふありて一朝中へ然まとのりゆして
い尾さうみのふた子原万次も於本人家も古きあらぬ多
換ト家を一ト又奥津田井庸宗是又ねえ多けまが倒れす
多く流々の往来難済せりすりうづ川もあら傍て是まきあ
ありしや支う吉原源津海なしさまとすあらねど狼へて
大弓の浪水倒き本弓傍てあら脇の田堵も出来りす
○伊豆の二島の一ト高さく漢えへきてみつた田大田みづうさ
石とも大風あるのとす像ふ沙のむとありを施義のよ牛を
猪ふト田へ出嫁きまぐれ風あをナーハと御一具へ上げ沙よき
がなふつるきをあら大弓のみ流をありて施義のよ一猪とども漢四
の森みーとへ風弟と通じてあ
○あくまへ然までのゆきをと繫昌の湯波場をまぐれのあら
きあふゆきをとる他ふの人々大きき聲きびきる
○お極へ移り去肥まぐれ梅波にのめばゆくト田ふ考しき大荒
支うる木井の新場處大私小私す壊すと又の立場へゆくらむと
りの數知りを細代すりこぼく海の津波みぎてき聲をあきども
聲する人々是をだきう又浦賀をあらのあら先年の津波と知り
あきどもあらとりども寒く恐怖とすとすとす

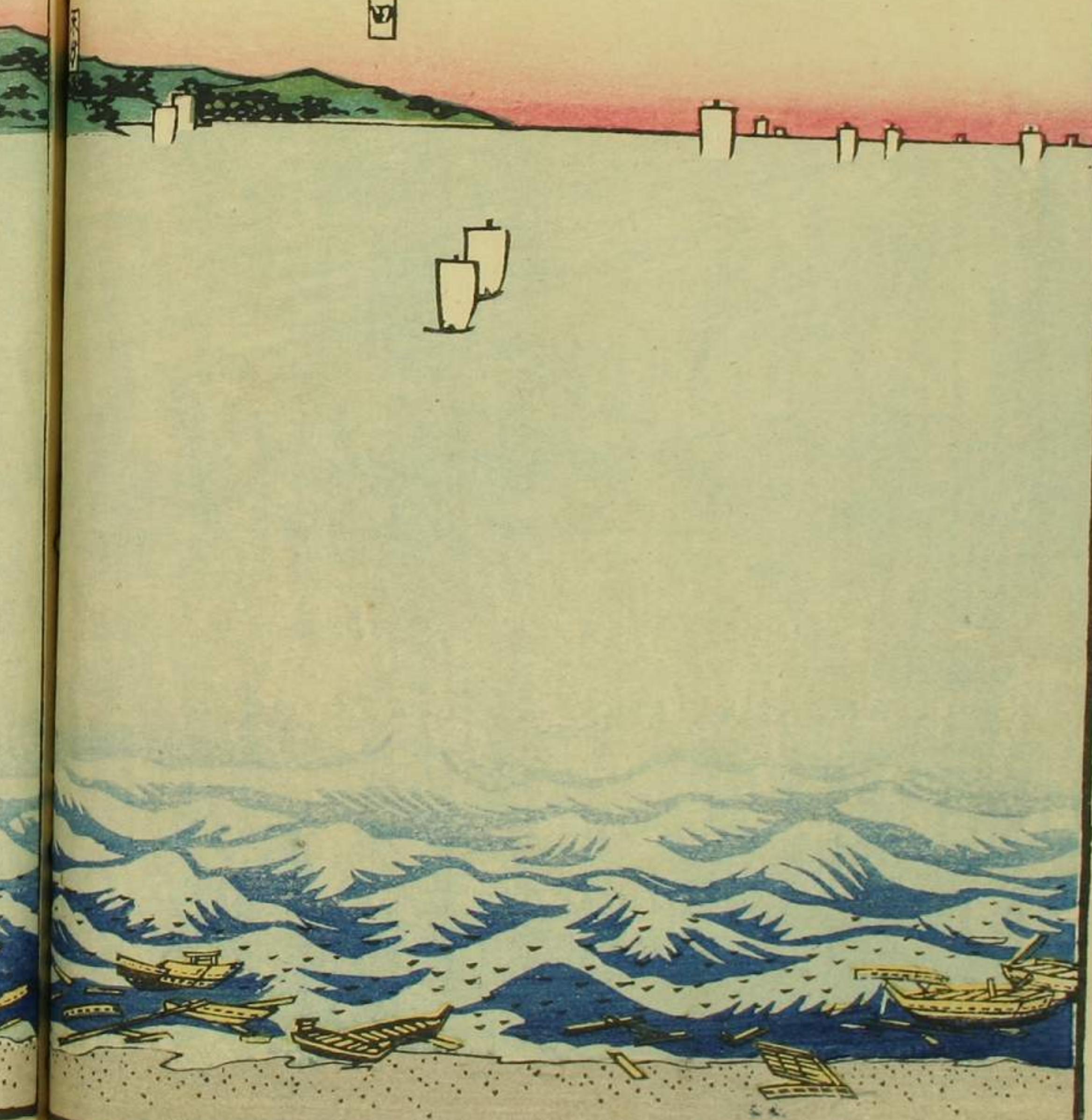
は井良津の
ひんあて彼の
大風の
ひえきり
壁紙
えいし
海屋の

海屋

まもと豆子の
たのみ破被
トモ
なまさせ船不
せんへん月と

下田

驚き
おうき
おうきしげ
きよかへんあらが
流石海巴の眺め
眼のとく限つあまび
をとる浦の花せ
ともあひまく
例日ふ勢の絶景
みて來金ととあと
食く機うちのがる
里へいともあらう
ス人ふと
のまどあふ
易そのく



西浦 村 鈴 地町 和あ庵 純系の跡 ふ安先生の津
浪の巻へ頬づか激ゆ月の色と人只すねば海端へ仰あお
みて不振と云どり然せらるりと其處ふ又を廻り怪面を記し
するがひづくと彼ふちの才とあら冷とと重とおち立
てば家内へあとまつめ忙勉とさよるのとるもそののう果
て是とばえふ星とる者皆引被まで一身やりありとるを
承石後さなみてば家内候海へ勤溺あるもあら又或人ある
支津浪とばよき人の奥と接と脊員くゆく跡あよ是え
波のあら灰妙と命助とじと接の蓋明け用金のとれて身
體不走光と事き令と捨ひ裸を纏ひて是とば晨あき松の枝不
主人の甲そりてありしとばも外の色添えしとばも一とばは
あまらるるべ

支猛烈 一とばねど教中のとて一傷ふ心痛る一とば人の屬死
せりのととく是ハ津浪本あくびて只あ風ふあ波と吹上

来るべ

○又金沢本牧のとてとくの吹きまく波を駆けぎ是とば
被換ふ及ぐうと是次あせらるみとものあらあるあらべー
○衝波へ船根ふ田本大波平坂はらい海え迎きぬるはば是とば
換のとば波氣質波ふふそくするあり波次戸塚船屋の事ひ見
へねとも風ふち又を駆けみそとひを駆けたまと換トがくとくへぬ
本ヌと倒とくもえ及ぐば一板おもりひづく
○小田本すう風來のと圓うつ陽あくとくをあ不塙の波へ行途ふを
きる橋を一とばふか不押流をとば門を廻りてゆく



木賊よりゆり人の街
波打の東海といふ一つの
小川とあれども氣きの種類とあじて
けりかの流れを清めまわる
よの流とすらば取縁ふ多押出るをふるみあひと勤めよのゆく
逐逐をふ凡て烈々大消きるがふ縫く
漸く、逐々絶ふ波湯扇の別處を下株あふ流す
○余が友賓傳一跡ぬ、お見え浦歌みせんといふむね
西八月せに五月の夜ふうんそヶわ取ふ人静まゝに後夜半とも
き海とのひとく邊あく鳴動うびいと煙そて睡眠もつて取る
しり旅食のき人ふはると聞べき人差へてうる根ひ是古老のまひ
傳ゆるの鬪ひうべと後ふうふちか風流波のえぎ
海底のあ深文と聞ひてうのうべと人へあ聞と見て洪波の

もさうとてかまをも得ざきよりふるん按すふ春秋の書ふ穀洛
の水闘（のち）かと玉宣（たま）と（ヤハ）と戒（ヤハ）を又行書紀事とつづるも云我
云洛伯用とりふ水林河伯馮支（あいじ）の（うそく）と闘（とう）とあると云ふ
行書（こうしょ）へ大ふ妄談（わうだん）の傳（でん）あると一向（いつな）もふとぞさふあると春秋（しゅしゅう）
聖人（せいじん）の（あらう）と云ふ傳（でん）と（あらう）とも是（これ）を又宋史（そうし）の五行志（じぎょうし）
載（さる）せうる宋の（さう）家（け）の紹興（しょうこう）十一年樂平縣（らくひんけん）と（りへん）て（と）の（あらう）自然（しぜん）也（よ）と田（たん）ふ入り數百（すゑひゃく）所（しょ）と（あらう）又田（たん）の（あらう）自然（しぜん）物（もの）として汲（く）か
ゆ（ゆ）一地（ち）よりもさり教丈堪（かうじかん）堰（えん）又けども自然（しぜん）抑（おさ）むを里（さと）の
あの方（かた）うる家（け）の井（い）の（あらう）又立（たて）せり數（すゑ）千石（せんごく）錠（じやう）株（かぶ）の（あらう）一處（いちしょ）もあ
ふ考（かう）一地（ち）を破（は）て退（しりぞ）る十余刻（じゅうにち）社（しゃ）と二（に）の（あらう）元（もと）の（あらう）あふ海（かい）又説海（せきかい）
と云すもふ貴州（きしゅう）の（あらう）定衛（じょうえい）と（あらう）ふふちの地（じ）あり衆（しゆう）ふ入（いり）てあ吉（あきち）

冷ト多ふ或人戸と寢まきてえまくらあ面ふかうて近村御戸
と聞て衆の間るとお既不承ゆりあも減トトナリ人との聞
きるやんと云と云へ

○神志川より海を芒形田す一寺旅ありと名とを稱あふと云ふ
ある百姓モ一が先年のに戸の地主の後ちうて死ゆふらひ自
己令移ス不見えけどばよ迷家と建坐一太き深とれ退ケぬ
きみ船へ尾と下して茅革とえきむ死もの急るのみ仰もすと
振ひ一うり鶴の糞は及の大風ふ家根とを絶せられと他家へ
迄までふ強没せねとを解あ事と一張ふ強殺せりとの事き
至ふる長脚とて祖父の代より周窮ありしが家の運徳も如來
ざまくば怨むわゑふ場立柱立根の自外ふ縦りて傍ひゐあお
がまくば怨むわゑふ場立柱立根の自外ふ縦りて傍ひゐあお

舍と濱きとしげおは後の大風みに村中わゑと次倒きと或ひ
家根と吹めくら是と上る汝押上ありてはまどるわゑと引そ
往く行へる味喰は爲外の煙き流達を失ひて強没するの
多き中不長脚がわゑと埋立の柱立と一ふも流達を失ひて家根
ハえ来と縦縦とけふあはまくへ先又ガーの破損のこみて安樂不
可とさうとらふふる松山の長者の家焼跡もまた勝不及
へと妻の一焼終そゆううきとて又も強没するが如
弱者と引物を渡人のかねまふと紙と書たしめ
○神志川より海を芒形田す一寺旅ありと名とを稱あふと云ふ
彼の多いの度ひえ一丈うり生麦白木村布場村御子町かをも
りと川八十丈でわとも鬼の轟う強く一朝の夜とがふとれゝるも

度とふ渡すあり又往来へみと次上へ汀ふ喰う處の所の所へ又
海端へ本牧より稻田あり繫き至る所へ走せ御まぐれの流と來り
走る所は源文の小家に押御さまでも多がみて木下ふくえとあうとよう
船場のあらみの水田ふ源とおへり是る次の引附ふわくわくあらうと
○川端より六々の波一見又出あをあ如何とも發養ふ及び一見川端
八幡塚難をき町小あ蒲田大森村崎ノ森源川口に彼のる波と津浪と
かねあの中と潮とひそへ近一者もあう遊きあら近るるくお根へ
坐り者もあらても發さ大方うへぞ象坐て後ふ家根地の被損ふ當寒
きありのあ

○ふ川端より走ふ山腹山の立高ふ今が一見傍に波如へ近んと走る
内道と風あ辭よりて汝まへりけば安ふもども種々のあらふ流され

潮く尋ね得くらむみく又ハち切のあ帳など矣みひて固くもあら又
場の前後た根ふを並べて走れぬ船大小さふ吹きせあら是等を元
の源海へ歩をふ多く日暮をしきり中ふも今後行送の美玉形の大船
破損ひ及べねと潮潮へ吹きせ是がふふあ碎くとみゆかみゆととく
○手が初見る人の方みひ大くの職人と見ふ灰ふ波鷹と云漢あは
岸まきまでのきひ料十五余枚紙へ墨一と皆う汝ホ押流と見
屏とりと松の葉あ二枚紙ふうへと焚うての御あり
○宝満半町へた地蔵うるそらへ不敵避けとてる波の森まで揚
るふ聲きて崩壊する多くの竿とふをすりて近えと廻るなり
の支那船考め表きて取せど半ハ統不勝ようり引ひそとやう一
向ふ動ねば圓ト累トの脚あり既不此年地表の時馬と逐

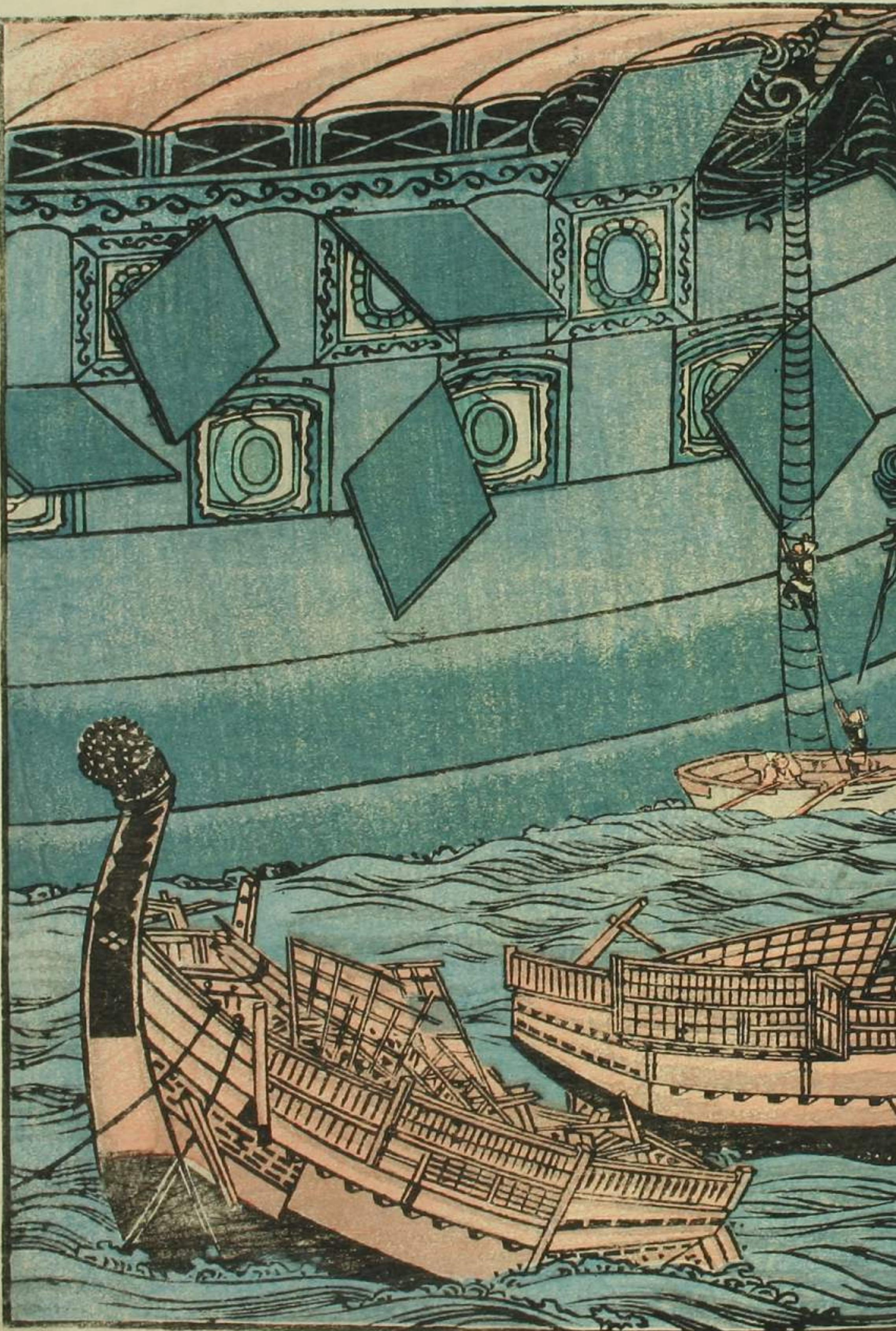


して園うつての表裏のゆきりとを心痛とぞやうふき
○支うち田所本多也破損多くれの辻うちと田之内破損多くせ物の
表裏云實大書院界さう一昔今杉原よりの派小門主御
とて人家萬々大破不及ぶればその破損の形勢の輕き事ふとて猶
くて画エヌ筆ノ底せば支とみてお野ね也

○行門本主乎目うち風あの中ふ出人して近卫がくん税失一表裏うへ
宇多川町まで日彦町へ移明町あらんとも不税拂のことを阿角主を告
御るふは後矢方せ一家のき入うりのへ替あさんとを怪して怪と居
是とも毛利法う後て町内役人うり内に毛と税ふは後の猛烈ハ列
院の夏すうまぐちも強ちふむ拂の強くを経て税小城さう一案
而仁東の山沙汰うと漢と毛代一鉢び立

○西脇門本主と云ふ破損の家多さう中ふも裏傍屋
清へ悉く渡り一アリ前てば多ふ限らまく此春の後年へさ
扁うぬ家の多けまうび支考へ口と御まうアリ既に先年へ去定を
表ひ又家悉く税没せ一アリ既にハ裏人の怨義ますモ教教奉
遣あうぞ寛ふ五人も莫大拂の本城ふ及ぶとりの外天の附とも
りべれう

○傍よる山内看守所と破損多く亦ナリ大木倒るゝ事一初
も一のえ保と町家本多家安安と相一毛高下多う登安
表國換ト大のえ換教訴居る
○あん松芝に尾浜町までの河所と水深家あり根度二丁目自守
安火のえ標梵鐘を拂うまく往來へ居る象高大根づれ薪又



我本流あるニ移一とより是ハハ丁始ニ年方始已故て河原
ト候至るニテ此の移事るヨリ一はち日本橋までお申を
支シ本町至ル東西十数步今川橋より内神田すらある
ソども逆側市ふ等へ近左異く

安政風聞集卷之上了

